

古典の世界(一)

声に出して楽しもう
長い年月を経て、今日まで読みつがれてきた作品を古典といえます。
千年以上の昔から、人々は、どのようなものを楽しみ、何を見て、どんな気持ちを感じていたのでしょうか。

多くの人に知られている古典の、始めの部分を集めました。

言葉のひびきやリズムを味わったり、様子子を想像したりしながら、声に出して読みましょう。

古典の一場面をえがいた絵



竹取物語

・古典

伊勢物語図色紙



源氏物語絵巻



紫式部
源氏物語
の作者



枕草子図



清少納言図
枕草子の作者



あんしやう
暗唱する①(覚える)

竹取物語

今は昔、竹取の翁といふもの
ありけり。野山にまじりて竹を
取りつつ、よろづのことに使ひ
けり。名をば、さぬきのみやつ
ことなむいひける。
その竹の中に、もと光る竹な
む一筋ありける。あやしがりて、
寄りて見るに、筒の中光りたり。
それを見れば、三寸ばかりなる
人、いとうつくしうてゐたり。

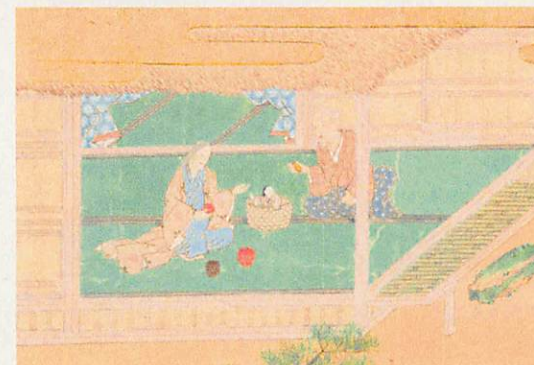


10

ばいよう
内容(覚えなくてもいい)

昔、竹取の翁とよばれる人
がいた。翁は、野山に分け
入って竹を取っては、いろい
ろな物を作るのに使っていた。
名前を「さぬきのみやつこ」
といった。
ある日のこと、その竹林の
中に、根元の光る竹が一本
あった。不思議に思つて、近
寄つて見ると、筒の中が光つ
ている。それを見ると、手に
のるぐらいの小さな人が、と
てもかわいらしい様子です
わっていた。

10



おじいさんとおばあさんに大切に育てられるかぐやひめ

15

あんしやう
暗唱する②

平家物語

祇園精舎の鐘の聲、
諸行無常の響きあり。
沙羅双樹の花の色、
盛者必衰の理をあらはす。
おごれる人も久しからず、
ただ春の夜の夢のごとし。
たけき者もつひには滅びぬ、
ひとへに風の前の塵に同じ。



5

内容

祇園精舎の鐘の音は、
「全ての物事は移り変わ
る」ということを人に思
い起こさせる響きがある。
沙羅双樹の花のすがたは、
いきおいのさかんな者も
いつかはおとろえるとい
う道理をしめしている。
おごり高ぶる人も長くは
続かず、ただ春の夜の夢
のようにほかない。強い
者も最後には滅びる。ま
さに風にふき飛ぶ塵と同
じである。



平家が滅んだ、壇ノ浦の戦いの様子

「平家物語」は、平家とよばれる武士の一族が、栄え滅んでゆ
くさまを書いた作品です。作者は分かっています。
移り変わる時代と、その中を生きる人々のすがたに、昔の人は
何を感じたのでしょうか。

15

徒然草

兼好法師

つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、
心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく
書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。



することがなく、たいくつであるのに任せて、一日中、
硯に向かいながら、心に次々とかんでは消えていく、と
りともないことを、なんという当てもなく書き付けてい
ると、みように心がみだれて、落ち着いていられない。



そまつな、小さな家の中から外を見る兼好法師

「徒然草」は、人間の生活や行動、移りゆく自然のすがたなど
について書かれた作品です。作者である兼好法師の、ものの見方
や考え方が表れています。

おくのほそ道

松尾芭蕉



月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅
人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて
老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ
去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている。一生
を舟の上でくらす船頭や、馬のくつわを取って老年をむか
える馬子（馬をひいて、人や荷物を運ぶ仕事をする人）な
どは、毎日毎日が旅であって、旅そのものを自分のすみか
としている。



人々に見送られ、旅に出発する芭蕉と曾良

「おくのほそ道」は、松尾芭蕉が、江戸（現在の東京）を出発し、
弟子の曾良と共に、東北・北陸の各地を経て大垣（現在の岐阜県
大垣市の辺り）にいたるまでの旅を記した紀行文です。

旅先で見聞きたことに心を動かされ、書きつづる気持ちは、
今のわたしたちと同じだったのかもしれない。